

特集論文(土木計画学におけるリスク分析と応用)

過疎地域活性化のグループ・ダイナミクス —鳥取県智頭町の活性化運動 10 年について

杉万俊夫¹・森 永壽²・渥美公秀³

¹正会員 学博 京都大学助教授 総合人間学部 (〒606-01 京都市左京区吉田二本松町)

²博士課程 京都大学大学院人間・環境学研究所 (〒606-01 同上)

³Ph.D 神戸大学助教授 文学部 (〒657 神戸市灘区六甲台町 1-1)

鳥取県八頭郡智頭町において約 10 年間にわたって展開されてきた過疎地活性化運動を、①運動の推進主体の立場、および、②活性化運動のターゲットとなった村落住民の立場のそれぞれに立って記述し、その特徴をグループ・ダイナミクスの観点から考察した。村落住民の閉鎖性・保守性を克服する上において、住民の畏敬の対象となり得る外部者(外部からのイベント参加者、都市の大学人、外国人) が果たした役割の重要性を指摘した。また、活性化運動の成果を村落住民が自らの伝統性の中に土着化するプロセスを通じて、村落の変化がもたらされることを指摘した。

Key Words: rural activation, group dynamics, community

「人々が、それに共鳴して行動を共にするのは、豊かな人間性と類まれな発想を持つ情熱の人に対してだけである。熱い心しか人を動かせない。企業とはまた違う、「地域づくり」という膨大な創造の分野は、芸術的でさえある。」これは、ある山間過疎地域の活性化運動に心血を注いだリーダーたちの、常にかたわらにいた女性の言葉である。彼女が「芸術的でさえある」と表現する地域活性化というドラマ、それは、ごく少数のリーダーの熱意としたたかな戦略性、それに一人、また一人と合流していく支持者たち、そして、リーダーや支持者を「囃」とすれば、それに対する「地」とも言える一般住民が、地域という自然的、歴史的、政治的、経済的、文化的舞台の上で織りなすドラマである。本稿は、鳥取県八頭郡智頭町において約 10 年にわたって繰り広げられてきた地域活性化の「芸術性」の一端を、人間集合体が織りなすドラマに関する科学---グループ・ダイナミクス---の立場から抽出しようとする試みである。

以下、まず、(1) 智頭町において約 10 年間にわたって展開されてきた活性化運動を、主として、運動の推進主体の立場に立って記述し、(2) そのグループ・ダイナミクスの特徴を考察する。さらに、(3) 今度は、直接、活性化運動のターゲットとなった村落住民の立場に身を置いて、活性化運動が村落に与えたインパクトに関する記述を補足し、(4) そのインパクトを、再び、グループ・ダイナミクスの観点から考察する。なお、グループ・ダ

イナミクスの基本的視座については、本特集の岡田・杉万論文²⁾、より詳しくは、杉万³⁾を参照していただきたい。

1. 智頭町における活性化運動 10 年 (1984-94 年) の経緯

(1) 核集団となる 2 人の出会い

ここに紹介する一連の地域活性化運動は、M氏(当時 48 歳)とT氏(当時 36 歳)という持ち味を異にする 2 人の偶然の出会い(1984 年)に始まる。まず、出会いに先立つM氏とT氏の生い立ちについて簡単にふれておこう。

M氏は、中学卒業後、父親が始めた製材所の手伝いに加えて、炭焼き、山仕事、雑貨品行商に従事した。そのかわら、青年団や消防団の活動にも参加し、バスケットボールや駅伝等に活躍、青年団長、子供会会長、町体育指導員にもなっている。このような青年時代の後、M氏 30 歳の時、父親が経営する製材所の倒産という苦難が訪れる。しかし、M氏は、この苦難を乗り越え、自らの製材所を起こし、現在に至っている。M氏の製材所は、関西に大口の納入先を持つため、M氏は、頻繁に関西と智頭を往復している。M氏は、製材所経営のかたわら、消防分団長、地域の公民館長、小学校 PTA 会長、町 PTA 連合会長、地区公民館長、財産区議員、等を歴任、スポーツ、祭り、PTA 活動、等に企画力を発揮した。このように、M氏は各種の伝統的地域活動団体の役職についてきたわけであるが、従

来、このような役職は、主として、地元の資産家、有力者によって占められてきた。そのような慣行にもかかわらず、資産家や有力者の家系ではないM氏が各種の役職に推されたことは、M氏の人望の厚さと行動力が地元住民に高く評価されていたことをうかがわせる。

一方、T氏は、高校卒業後、民間企業に1年勤務して、地区の郵便局に再就職。仕事のかたわら、青年団活動に参加、バスケットボールや演劇に活躍した。また、このころ、NHK「青年の主張」中国地方大会で優秀賞を受賞したり、総務庁第6回「青年の船」に乗船するなど、すでに、行動力と発表力の片鱗を発揮している。T氏は、25歳の時、自らの希望により中国郵政局（広島市）に転出、中国郵政局在任中、広島郵便貯金会館の運営、岡山郵便貯金会館の施設構想づくり、職員の教育訓練、コンピューター導入等に携わり、企画力、行動力に磨きをかけていった。しかし、転出後5年、突然、肝炎にみまわれ、仕事も思うようにできない焦燥感に駆られる日々が続くようになった。その後、T氏を故郷の特定郵便局長に迎える話がもちあがり、35歳の時、10年間の広島生活にピリオドを打ち、局長として帰郷した。T氏は、帰郷直後から、広島時代に磨いた企画力と行動力を活かして、周囲の反対をも押し切り、自らの郵便局の業務改革、他の郵便局の職員をも巻き込む勉強会の開催、等を開始した。

M氏とT氏の偶然の出会い、智頭町山形地区が鳥取国体（わかとり国体、1985年）の空手会場に選ばれ、智頭町全体が一種独特の興奮に包まれる中で起こった。当時、地区公民館長であったM氏は、国体参加選手および観戦者への土産品として、智頭町の名産品である杉の間伐材を利用した写真たてを制作中であり、他方、T氏は、郵便局業務改革の一環として、杉板葉書の制作、商品化を企画中であった。2人の出会いは、T氏が杉板葉書の制作業者を求めて、M氏宅を訪問した時に始まる。2人は、同じ地区の出身でありながら全くの初対面であり、M氏が長らく親しくしていた知人の子どもが実はT氏であるという関係を知り、2人は驚いたほどであった。2人が初めて出会ってから1週間ほど、T氏は、仕事そっこのけで連日M氏宅を訪れ、2人は自らの人生や智頭の現状と未来について語り合った。その語り合いの中から、「ごく一握りの資産家や有力者に牛耳られるまま、新しい試みの一切を拒絶する旧態依然たる地域の体質に対する不満、そして、この体質を何とか打破しなければならぬという熱い思いを共有していった。」（T氏）

(2)前期(1984-89年)

幸い杉板葉書や杉製写真たてが好評を博した国体の年（1985年）、2人は、同じく杉を利用した杉名刺の開発に乗り出した。また、翌年に設立される智頭木創舎の準備段階として、智頭木創企画（M氏、T氏他3名による）を

設立、杉名刺に続いて、杉の香はがきを開発、商品化した。1986年には、智頭木創舎が発足し、昆虫はがき、エト遊便などの木の葉書、木づくり絵本（杉板製の絵本）、等の商品を送りだした。

ここで注目すべきは、いわばインフォーマルな地域活動によって得られた物的成果やノウハウをそのまま放置するのではなく、特化された目的遂行のために長期的に存続していくフォーマルな組織を設立し、その中に物的成果やノウハウを定着させていくという戦略がとられていることである。杉板葉書、杉製写真たて、杉名刺のいずれにしても、郵便局や製材所の本来の業務とはいわば別建てで、M氏とT氏を中心とするインフォーマルな活動によって開発された商品である。その商品そのもの、および、商品開発・販売のノウハウを、智頭木創舎という、木工品に特化した企業の中に定着させているのである。この戦略は、その後も、各種のイベントの成果や海外交流活動を定着させるために一貫して用いられていくことになる。

ここまでの活動によって形成されたM氏、T氏の核集団、および、その核集団に協力する少数の人たちは、1987年から1989年の3年間、智頭杉の高付加価値化を目的とする3つのイベントを次々に実現していく。その第1段は、1987年に行われた「木づくり遊便コンテスト」である。このコンテストでは、杉板葉書のデザインが全国から募られた。538件という多くの応募作品が寄せられ、特選入賞他約20点の入賞者とともに授賞式が行われた。コンテストに寄せられたデザインは、女性3名で発足した「智頭ウッドクラフト研究会」の手によって商品化されていった。

3つのイベントの第2段は、1988年に行われた「智頭杉「日本の家」設計コンテスト」であった。このコンテストでは、杉の特長を活かし、日本人の生活様式の変化にも応え得る木造建築家屋の設計図を全国から募った。応募作品は148件に及び、著名な審査委員による審査を経て、特選作品（農山村用、都市部用各1件）他10件の入賞作品が選ばれ、盛大な授賞式が開催された。授賞式に出席した特選受賞者の一人は、「コンテストの主催者は、智頭町役場と林業関係者の代表と思っていた。まさか、住民主体の小集団組織が、これほど大規模なコンテストを企画し、仕掛け、実行し、成功させたとは想像もできなかった。」と記している⁴⁾。入賞作品をはじめとする設計図は、コンテストの翌年に設立された建築供給組合に貴重なノウハウとして蓄積されていった。

3つのイベントの第3段であると同時に、杉板葉書、杉製写真たてに始まる「智頭杉の高付加価値化」を軸とする前期の総決算とも言えるイベントが、1989年に行われたログハウス群の建設であった。また、後述するように、このログハウス群建設は、智頭杉の高付加価値化を軸とする活動が展開された前期（1984-89年）の最終段階であると

ともに、学問・科学および異文化とのふれあいによる人づくりを軸に展開された後期（1988-現在）の初発段階としても位置づけることができる。ここでは、まず、前期の最終段階としてのログハウス群建設に焦点を当てる。

1988年、「智頭杉「日本の家」設計コンテスト」の推進中、M氏とT氏の核集団を中心として、智頭町の中でも最も山深いところにある村落、八河谷地区にログハウス群を建設しようという企画がもちあがった。ここで、八河谷地区が選定された理由を説明するには、若干の年月を遡らねばならない。1986年、智頭木創舎設立の同年、4人の町会議員とT氏も加わった。八河谷地区の一隅に「杉の木村」というイベント・ゾーンがつくられ、都市と農村の交流をテーマとする春秋のイベントが何回か行われた。過疎に悩む村落のシンボルとして、智頭町最深淵部の八河谷地区が選定されたのである。しかし、結果的に、この一連のイベントは、雨が降れば中止せざるを得なかったり、参加者も思うように集まらなかったりで、必ずしも成功しなかった。このような過去の経緯があつて、1986年当時の本来の目的…地域活性化のモデルとすること…を実現するために、八河谷地区がログハウス群建設の舞台として再浮上したのである。当時、鳥取県知事が提起していた「ジグ起こし」^{註1}の具体例を作りたいというねらいもあつた。

ログハウス群建設の企画、計画立案は、1988年半ばからスタートした。まず、ログハウス建設のノウハウを習得するため、2名の青年がカナダに1ヶ月派遣された。また、後に述べる経緯で準核集団の一員に加わるO氏の人脈により、カナダの高校教師でログビルダーでもある女性が、建設指導者の候補として浮かび上がり、懸命に来日交渉が行われた。実際の建設作業に当たる人々は、5日間の作業従事に対して、完成から向こう5年間、年3日、無料で利用することができるという条件で、全国から新聞により募集した。また、完成後のログハウスの管理・運営については、地元八河谷地区の住民に産業組合を結成してもらい、それに管理・運営を委ねるという方針が立てられ、八河谷地区住民代表者との折衝が行われた。

以上のような準備のもとに、1989年夏、朝日新聞の小さな紹介記事に心動かされた68人の参加を得、前述のカナダ人女性ログビルダーの指導、核集団および協力者の懸命の努力によってログハウス4棟が建設された。このログハウス群「杉の木村」は、紆余曲折を経ながらも、杉の木村産業組合（後述）による管理・運営に移行し、さらに、その後、ログハウス2棟も建設され、現在では、年間12,000人の来訪者呼び込みまでに至っている。また、別荘としてログハウスを建築し、頻繁に「杉の木村」を訪れる人も数人現れた。今では、「杉の木村」は、八河谷住民の誇りにすらなっている。

(3) 後期（1989-94）

まず、後期においてM氏、T氏とともに準核集団を構成することになるO氏（当時41歳）が、前期の終わり頃、この地域活動に関わりを持つに至った経緯から述べよう。

「智頭杉「日本の家」設計コンテスト」が行われた1988年、核集団は、地域活動の中に国際交流の要素を取り入れようと考え、その手始めとして、地元の大学である鳥取大学の外国人留学生を智頭に招待し、地元の子供たちとの交流会を開催するという企画を立てた。そのために、T氏は、当時、資金面で助成を受けていたある財団の研究者と連れだって、鳥取大学を訪問した。しかし、数人の教官に留学生を紹介してくれるよう協力を依頼したものの、はかばかしい返事を得ることができず、最後の一人として訪れたのが工学部教授（社会システム開発論専攻）のO氏であつた。O氏は、T氏の依頼に即座に賛同、協力を約束した。その時、T氏は、O氏が過疎地の地域計画をも研究テーマとしていることを知り、O氏に自らの地域活動のアドバイザーになるよう依頼した。

O氏は、その後、何度か智頭を訪れ、それまでの地域活動の実績を知り、また、当時、核集団とそのサポーター約30名によって設立された「智頭町活性化プロジェクト集団（Chizu Creative Project Team; CCPT）」のメンバーの熱気に触れる中から、次第にこの地域活動を指導するとともに研究フィールドとすることを決心していった。ただし、O氏の決心を躊躇させたものが一つあつた。それは、核集団に見られた政治（町政）志向の側面であつた。もちろん、このことは、それまでの地域活動が町政（例えば、町長選挙、町議会選挙）に打って出るための手段であつたという意味では毛頭ない。ただ、都市とは違って、人口一万余りの小さな町村にあつては、地域活性化を志すような人間にとって、町政への進出は、伝統的には、むしろ常識的な選択肢の一つであり、ここに登場する人々もその例外ではなかつたというに過ぎない。しかし、O氏は、自らの参加が政治的に利用されることを断じて拒否、もし、政治志向を払拭しないならば自分は参加しないと、核集団に政治志向の放棄を迫った。これに対して、核集団は、政治志向の放棄を決断、以後、町政とは一線を画す形での純粋な住民運動路線を歩み続けることになる。政治的権力とは一線を画す住民による政治が志向されるようになったとも言えよう。

O氏参入後、M氏とT氏の核集団は、従前にも増して「核」集団として成熟していったが、同時に、O氏とT氏との学問・科学を仲立ちとする強い信頼関係も形成されていった。したがって、M氏とT氏の核集団にO氏を加えた、いわば準核集団が地域活動、すなわち、CCPT活動の中心となつていったと言えよう。一方、O氏の参加直前のCCPT設立（1988年）によって、核集団ないし準核集団をサポートする約30名の人々は、個人的協力の域を越え

て、一つの集団のメンバーとしての所属意識を持つに至った。

〇氏は、まず、CCPT がログハウス群建設によって活性化しようとしていた八河谷地区の実態調査（1988年夏）に着手した。この実態調査は、八河谷地区住民はもちろん、八河谷地区から町外に離れていった元住民をも調査対象とする徹底的なものであった。調査には、〇氏の研究室の学生が総動員で当たった。しかし、調査結果を一言で要約すれば、「八河谷地区を離れていった人々に、再び帰郷する意思はほとんどなく、放置する限り、八河谷地区は過疎化の一途を歩む」というものであった⁵⁾。地元住民に対する調査報告会（1989年）は重苦しい雰囲気に含まれたと言う。しかし、〇氏は、とにもかくにも、これが現実であり、現実を認識することからすべてを始めなくてはならないと、主張した。また、前述のとおり、〇氏は、すでに進行していたログハウス群建設計画に対しても、種々のアドバイスを与えるとともに、自らの人脈により、カナダ人女性高校教師のログビルダーの来日交渉に尽力した。

1989年のログハウス群建設以降のCCPT活動は、そのウエイトを物づくりから人づくりへと移行させる。とりわけ、異文化および学問・科学とのふれあいによる人づくりがクローズアップされてくる。まず、異文化とのふれあいについては、1988年のCCPT設立に引き続いて、智頭町活性化基金を設立し、それを財源とする青年の海外派遣を開始した。具体的には、ログハウス群建設のために来日したカナダ人女性高校教師の勤務校に、智頭町の高校生13名（1990-92年の3年間）を派遣した。この高校生派遣は、1993年より、地元の智頭農林高校が国際交流支援協議会を設置して継承、同校PTAや鳥取県教育委員会もそれを公認するに至っている。高校生と並んで、同期間に、智頭町出身の大学生5名、および、青年社会人11名を、欧米、オーストラリア、東南アジアに派遣した。とくに、最初の青年社会人2名の派遣は、地元住民やマスコミの脚光を浴び、体験談を聞くための講演会も多数開催された。彼ら2名は、その後、CCPTのメンバーに加わっている。また、青年社会人の海外派遣は、1993年に、青年海外支援協議会に継承されている。さらに、海外派遣された青年5名は、1993年、智頭町未来人集団を結成、智頭町出身大学生の海外派遣を受け継ぐとともに、次第に、CCPTから親離れし、独自の活動を模索しつつある。

青年の海外派遣のみならず、CCPTメンバーを中心とする人々自身も海外との交流を進めている。彼らは、1989年より旅費の積み立てを開始、1992年には23人の一行がカナダを訪問、また、それに応じて、翌1993年には、カナダ人16人が智頭町を訪れた。彼らは、1996年のアメリカ訪問、2001年のスイス訪問、2006年のオーストラリア訪問を目標に、すでに旅費積み立てを開始している。さらに、前述した鳥取大学留学生を招いての子供とのふれ

あい（1988年）に続いて、1990年から、オレゴン大学学生4名を受け入れている。また、1991年には、オレゴン大学の学生や高校・大学の英語関係者の協力を得て、智頭の民話を英訳し、その英訳を用いた中学生のスピーチ・コンテストを実施、最優秀者をオレゴンに派遣している。このコンテストの実施は、1993年より、前述の智頭町未来人集団の手に委ねられている。

異文化とのふれあいによる人づくりと並行して、学問・科学とのふれあいによる人づくりも進められた。その最も顕著な活動は、1989年より毎年秋に開催されている2泊3日の「杉下（さんか）村塾」（吉田松陰の松下村塾の松を杉に置き換えた名称）である。この塾では、地域づくりに関連する多角的なテーマが取り上げられ、講師陣も、〇氏らの人脈により、多彩な大学人、知識人が年々参加するようになり、1993年には、CCPTメンバーを中心とする受講者27名とはほぼ同数の講師が参加するに至った。また、杉下村塾より規模は小さいが、地域の知的土壌づくりを意図した「耕読会」と呼ばれる半日程度の読書会が、1991年より、年4回のペースで、10年間継続の目標のもとに開催されている。1990年からの3年間、他の地域からの地域リーダーが一堂に会す地域リーダー養成講座も開催された。

このような学問・科学とのふれあいの中から、T氏は、自らの企画・計画立案の体験に基づき、一つの斬新なディスカッション手法---四面会議システム---を考案した。この手法については、すでに、「土木計画学研究・講演集」にも報告されているが⁶⁾、総合管理、人的支援、物的支援、広報・情報という4つの役割を配置して企画を掘り下げていく参加型の計画手法である。この手法は、現在も、CCPTメンバーが各種の企画・立案を行うときに頻繁に用いられている。

以上述べたように、1988、89年以降の後期は、主として、物づくりよりも人づくりに重点を置いた活動が展開されたわけであるが、それと並行して、前期の物づくりに重点を置いた活動の成果を定着させるための活動も行われている。具体的には、1989年に建設され、八河谷地区住民から成る杉の木村産業組合に管理運営が委ねられたログハウス群「杉の木村」をさらに整備充実するため、鳥取大学教官有志の出資によるセミナーハウスの建設（1990年）、杉の木村を流れる河川の親水公園化（1991年）、テニスコートの併設（1992年）が行われている。

1989年のログハウス群建設のノウハウは、その直後、CCPTメンバーの一人を中心として企業化され、販売は順調に拡大しつつある。また、毎年夏、参加希望者を募って、CCPTによる1週間のログハウス制作講習会が開催されてきたが、1994年から、この講習会も上記企業に継承された。

最後に、最近2、3年の新しい動きについて、2点だけ

紹介しておきたい。第1は、智頭町全体に関わる CCPT 活動の経験を踏まえて、T氏が、その特定郵便局を拠点に自らの居住地区において開始した活動である。具体的には、同地区の特産品を住民とともに開発し、郵便局を通じた商品として流通経路に乗せたり、同じく住民の協力のもとに、同地区に紫陽花1万本を植えたり、ボランティアの除雪隊を発足させたりしている。第2に、O氏らとその人脈による感化。あるいは、CCPT メンバーである鳥取県職員（河川担当）の影響を受けて、河川を中心とする環境問題に対する関心が高まり、1992年には、「ふるさとの川を育む会」が発足、1994年には、智頭町・県土木部・住民の三者一体で組織する「親水公園連絡協議会」が発足している。

2. 活性化運動の主体 (CCPT) に関するグループ・ダイナミックスの考察

以上紹介した智頭町における約10年間にわたる活性化運動を、グループ・ダイナミックスの視点から考察してみよう。具体的には、10年間の活性化運動を前期と後期に分け、前期に関しては、核集団（という集合体）と大多数の地域住民から成る地域集合体の関係に焦点を当て、後期に関しては、核集団、CCPT という2つの集合体と地域集合体の関係に焦点を当てて考察する。図-1は、その概要をまとめたものである。

(1) 前期—M氏とT氏の出会いからログハウス群「杉の木村」建設まで

この時期、まず、M氏とT氏による核集団が形成され、数人の協力者とともに、一つの集合体として浮上してくる。その過程は、あたかも、深く大きな沼の静かな水面に、一つの気泡が出現し、その小さな気泡が、それを再び飲み込んでしまおうとする沼全体の力に抗して、一つの気泡としての存在を必死に維持していくかのようにであった。実際、数百年の歳月の間に定着した地域の体質、すなわち、新しい変革の試みの一切を拒否する地域集合体の保守的集合性は、あたかも大きな沼のように、突如出現した集合体を再び自らの中に飲み込み、もとの静寂さを取り戻そうとした。ある者は無視することによって、ある者は冷ややかな眼差しを向けることによって、また、ある者は露骨な圧力をかけることによって、新しい集合体の出現を「一時の間違い」にしようとした。その中であって、新しい集合体は、地域の伝統的体質に対する義憤を一層強くし、かつ、したたかな戦略性にも訴えながら、一つの集合体としての存在を強化していった。「(当時は)自分でも狂気を演じていたと思う」というT氏の回想は、そのような状況下の心情をよく伝えている。

この時期における核集団の集合的行動パターンの特徴として、彼らが行なった3つのイベントの最初の2つが、

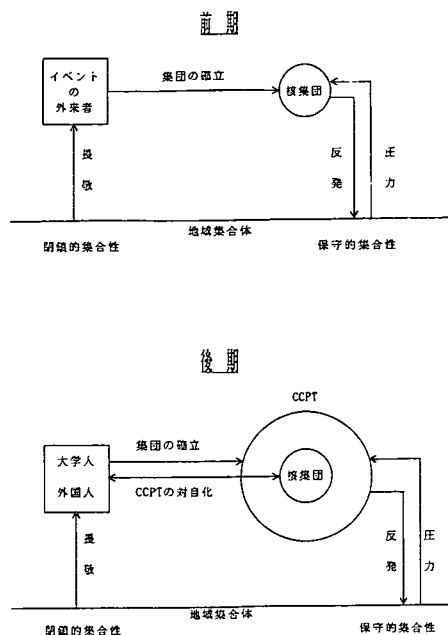


図-1 智頭町における地域活性化10年にみられる集合性の構図

いずれも広く全国から応募者を募るコンテストであったことに注意したい。繰り返し述べるように、彼らを取り巻く地域住民のほとんどは、彼らを見無視するか、冷ややかな目で見るとか、あるいは、彼らの「傍若無人の奇行」を止めさせるべく圧力をかけるかのいずれかであった。おそらく、彼らにとって、地域住民は、「ぬかに釘」のことわざに言う「ぬか」、しかも、とげ混じりの「ぬか」にも思えたのではなかろうか。そのような「ぬか」に釘を打ち込むためには、なまじっかの釘では通用しない。誰もが注目せずにはいられないような釘を打ち込まねばならない。そのような釘を打ち込んでこそ、自らの集合体の存在も強化される。その点、全国の多くの応募者の中から選ばれた「優れた」受賞者を、その「優れた」作品とともに一堂に集める授賞式。また、それに至る募集・審査の過程は、住民の注目を十分引きつける「釘」になり得る。マスコミの報道がそれに拍車をかけることは言うまでもない。

受賞者や多くの応募者は、閉鎖的な山間地の住民として、いわば「外の世界」に住む人々たちである。「外の世界」は、地域集合体こととしての環境的外部であり、すべての環境的外部がそうであるように、何らかの暗黙・自明の前提を担っている。では、地域集合体の環境的外部である「外の世界」は、いかなる暗黙・自明の前提を担っていたのだろうか。この質問に答える鍵は、地域集合体の「閉鎖的」集合性にある。狭い山間の地に自閉した集合的行動パターンを織りなすことが、地域集合体の日常であるということは、同時に、自閉する地域の外に広大な「外の世界」が

あることを自明なものとしていく。さらに、「外の世界」が広大であれば、その世界には、おそらく、自らの地域ではとても出会えないような優れた人物もたくさんいるはずだということもまた、自明のこととなる。つまり、地域集合体の閉鎖的集合性は、その裏返しとして、「優れた人物もたくさんいるに違いない広大な世界」という暗黙・自明の「外の世界」観を構築する。その広大な「外の世界」に住む多くの人々の中から選ばれた優れた受賞者や、その選考に当たった著名な審査者が、自分たちの狭い地域に集まれば、それら受賞者や審査員は、一種畏敬の目で見られることになる。したがって、このようなイベントは、いやが上にも注目の対象となる。引いては、そのようなコンテストを実現した核集団は、もはや否定しがたい存在として確立されていくことになる。同様のことは、2つのコンテストのみならず、多くの外来者や外国人指導者を巻き込んで実施されたログハウス群建設についても当てはまる。

翻って考えれば、このような「外の世界」を利用したイベントを企画し得たのは、おそらく、M氏、T氏のいずれもが、智頭の一般住民に比して、「外の世界」に精通していたことと無縁ではあるまい。前述のとおり、M氏は、関西に仕事上の大口得意先を持ち、しばしば関西と智頭を往復しているし、T氏は、約10年に及ぶ広島勤務の経験を持つ。両氏は、地域集合体に属するのと同時に、「外の世界」の人々との集合体にも属していた。したがって、「外の世界」の人々との集合体の一員として、地域集合体の集合性のあるものについては、それを外部者として認識することができたのであろう。地域集合体の「閉鎖的」集合性は、彼らが、外部者として認識することのできた地域集合体の集合性の一つであったに違いない。当時、M氏がT氏に語った言葉、「智頭の中だけを見て動かそうとしても智頭は動かない。智頭を囲む山々の稜線に、智頭をまたぐ「三叉」[※]を架けよう」という言葉は、核集団が、地域を活性化するための「外の世界」の重要性を認識していたことを物語っている。この両氏に限らず、地域活性化運動のリーダーには、一旦都会に出て戻ってきた人、いわゆるUターン経験者が多いのも、地域集合体の集合性、とりわけ、その閉鎖的集合性を外部者の目から認識できることによると思われる。

以上、前期における核集団の確立にとって「外の世界」が有した意味について考察してきたが、前期における今一つのグループ・ダイナミックスの特徴として、核集団にとっての主要な環境的外部であった「杉」の意味について考察しておこう。そもそも、M氏とT氏は、その出会いに先だって、それぞれ、杉を使った商品の開発に着手していた。また、既に述べたように、彼らの地域活性化運動は、ごく自然に、杉の高付加価値化を軸として開始されていった。つまり、杉は、彼らが何か事を起こそうとするとき、ごくごく自然に頼ることのできる、いわば無条件の与件であっ

たと思われる。それは、幕末以来の植林に始まり、昭和初期にほぼ現在のような杉の山々の景観に至った長い歴史的伝統の産物である。智頭の人々は、文字どおり、四方八方を取り囲む杉の山々のふところに包まれて、その一生を送ってきた。

杉は、智頭の住民を包み込む伝統のシンボルであるとともに、地域の伝統的体質、すなわち、地域集合体の伝統的集合性のシンボルでもある。山々の杉も、国有林をのぞけば、一握りの山林所有者の所有物である。明治以来、住民が生計を立てる上で、林業への依存度は、現在とは比べものにならないほど高かった。山林を所有することは、とりもおさず、地域の支配的地位にあることを意味していたのである。この支配の構造は、農地解放こそあれ山林解放はなかった戦後も、根強く存続している。地域を牛耳る一握りの有力者、資産家と言う場合、そのほとんどは、多くの山林を所有する者と重複する。山を持つ者と持たざる者、したがって、杉を所有する者と所有せざる者、この区別は、木材不況と言われる今日でさえ、なお、その意味を失っていない。

核集団が能動的企画・経営の対象とした智頭杉は、地域集合体の伝統的集合性、とりわけ、その支配の構造のシンボルでもあった。M氏、T氏のいずれにしても、山を持たざる者であり、後にCCPTを形成する人々も、同じく、山を持たざる者たちである。そのような核集団にとって、地域を牛耳る山持ちの山から切り出された智頭杉に、新しい企画・経営の刃を入れることは、伝統的な支配の構造に刃を入れることをも意味しよう。しかし、それだけに、彼らの能動的企画・経営の姿勢は、有力者や資産家のみならず、伝統的集合性に包まれる地域集合体の人々にとっても脅威だったのである。

(2) 後期—ログハウス群「杉の木村」建設から1994年まで

後期においては、核集団が徐々に獲得してきた支持者約30名と共に、「智頭町活性化プロジェクト集団 (Chizu Creative Project Team; 略称CCPT)」を設立。一方では、各種の国際交流活動を推進しつつ、他方では、都会の大学人、知識人と学問・科学を通じた交流を展開していく。また、M氏とT氏の核集団に、社会システム論を専攻する大学人O氏を加えた準核集団が、CCPTという集合体のリーダー的役割を果たすようになる。以下、最初に、約30名から成るCCPT集合体について、この時期の特徴を考察し、引き続いて、核集団ないし準核集団について考察する。

まず、この時期におけるCCPT集合体と地域集合体の関係は、前期における核集団と地域集合体の関係に類似していることを指摘したい。ここで、この時期、一応、CCPTという「集団」が結成されたとはいうものの、その構成メ

ンパーは1992年に至ってようやく対外的に公表されたことに留意したい。それまでは、M氏やT氏の行動に賛同した人が、個別的なプロジェクト遂行のためにM氏やT氏と行動を共にするという形態であり、M氏・T氏を介して間接的に一つの集合体を形成していたとしても、自他共に認める顕在的な集合体ではなかったわけである。その理由は、へたに構成メンバーを公表することは危険だったからに他ならない。確かに、前期におけるいやが上にも注目せざるを得ない核集団の行動によって、核集団に関する限り、地域住民も、当初のような無視の態度はとり得なくなっていた。そのことは、核集団に対する反発が強くなってきたことをも意味している。しかし、すでに、核集団は、直接反発を向けるにはあまりにも強くなっていた。その反動として、核集団を支持し、追従しようとするメンバーたち、とりわけ、年齢や資産の面で下位の立場にある者が、反発の矢面に立たされる危険性は高く、核集団は、メンバー・リストの公表に慎重にならざるを得なかったのである。つまり、後期、とりわけ後期の前半においては、CCPT という集合体のほとんどのメンバーには、核集団と行動を共にしたいという願いと地域住民から疎外されることへの不安が同居していたと言える。

この不安が払拭され、CCPT 集団の確立が達成されるプロセスもまた、前期において核集団が集団としての確立を達成していったプロセスと類似している。ここで、前期のイベントにおいて、「外の世界」から訪れた優れた受賞者たち…地域住民が畏敬の念を抱くような人たち…のことを思い出してほしい。後期における外国(人)にしても、都会の大学人や知識人にしても、智頭の地域集合体にとっては、同じく、「外の世界」の人間である。しかも、テレビや映画でしか外国(人)を目にする機会がない、また、地元には大学もない地域集合体にとって、外国(人)や大学人・知識人は、ごく自然に、一種あこがれと畏敬の対象でもある。したがって、そのような外国(人)、大学人・知識人と親しく交わることは、CCPT のメンバーに、自らがCCPT に所属することの正当性を見出し、自信を深めていくことを可能にしたと思われる。また、広範な地域住民も、畏敬の対象である外国(人)や大学人・知識人が、真剣かつ積極的に交流するCCPT を目の当たりにして、CCPT という集合体に対する認識を変えざるを得なかったであろう。ここに、CCPT が、そのメンバー構成を公表し得るだけの強固な基盤が形成されていき、CCPT 集団としての確立を実現するのである。

一方、核集団に注目すると、とりわけ、大学人との関係において、CCPT の一般メンバーに一步先行する特徴を見ることができる。すなわち、この時期から、大学人O氏を含む準核集団の中での議論、あるいは、O氏らの人脈により智頭を訪れる大学人・知識人との対話を通じて、核集団は、CCPT という集団自体のあり方を対自化するとい

う集合的行動パターンをとるようになる。それを最もよく示しているのが、T氏によって1990年に始められた「CCPT 活動実践提言書」の制作である⁷⁾。毎年約200頁に及ぶ提言書の中には、前年度の活動内容が詳細に記録されているのみならず、その巻頭には、CCPT の活動に関する総括と展望が、M氏やT氏によって記されている。ちなみに、平成4年度提言書のタイトルは、「新・地域リーダー考「エディター」の提案」⁸⁾、平成5年度提言書のタイトルは、「ゴールは近づきゴールは遠く…新しい助走にむけて」であり、まさに、核集団のリーダーシップのあり方、CCPT 集合体そのもののあり方が対自化され、議論と分析の俎上にのせられている。

3. ログハウス群「杉の木村」の地元村落へのインパクト

ログハウス群「杉の木村」建設の経緯については、第1節において、主としてCCPT の視点から記述したが、本節では、「杉の木村」建設が八河谷村落の住民集合体に与えた影響を考察する資料として、同じ建設プロセスに関する八河谷住民の視点に立った記述を追加しておく。それによって、CCPT による能動的な活性化運動が、その舞台となった村落に住む人々に、どのように受け入れられていったかが明らかになる。

八河谷村落は、智頭町の北東端に位置し、山間の地、智頭の中でも最も山深いところにある。冬は雪深く、交通も途絶えがちである。過疎化は顕著であり、1960年頃250人以上だった人口は、1994年現在、61人にまで減少、そのほとんどが60歳以上の高齢者であり、小中学生はわずか一人しかいない。

先にも述べたとおり、八河谷村落を地域活性化のモデル・ゾーンに選定し、そこを活性化しようとする最初の試みは、1986年、4人の若手町会議員によってなされた。八河谷村落住民は、「杉の木村連絡協議会」を結成、町会議員の一人の紹介によって、関西のある都市の生協とつながりができ、都会の人を村落に招いてさまざまな交流イベントを催した。しかし、当初は、村落住民ほとんどの協力も得て、「村おこし」関連の賞を受賞するほどであったが、2年も経たないうちにマンネリ化し、また、屋内施設がないにもかかわらず雨が多いという当地の気候的悪条件も重なり、活動はしりすぼみになっていった。

そのような中、CCPT のM氏とT氏が、八河谷村落の有力者の一人A氏を訪れ、ログハウス群建設の計画をもちかけた。M氏とA氏は、木材取引を通じて長年の知り合いであり、T氏は、A氏の知人の子供であり、T氏を幼い頃から知っていた。また、1986年の智頭木創舎設立に伴い、M氏とT氏が、八河谷村落の人たちに、杉製の葉書や絵本を制作するための糸のこ作業を紹介し、A氏、S氏ら5名

が「杉の木村木工組合」を設立して糸の二作業に従事するようになったという経緯もあった。A氏、S氏は、それぞれ、前述した「杉の木村連絡協議会」の会長、副会長でもあった。

最初、A氏は、ログハウス群建設の計画を聞いても、その実現性には半信半疑であったが、それまでの活性化イベントがしりすばみになり、その打開策もなかったところから、M氏とT氏の申し入れを了承した。その時、M氏とT氏は、ログハウス群が建設された後は、たとえ村落が二分されようとも、その管理・運営に携わる意欲のある八河谷住民だけで「杉の木村産業組合」を作ってもらい、その産業組合にログハウス群を無償譲渡するという方針を伝えた。併せて、今後、A氏がCCPTに対する八河谷住民の窓口となることを要求、A氏もそれに同意した。

前述のとおり、ログハウス群は、CCPTの懸命な努力によって1989年の一夏をかけて建設された。また、カナダ人ログビルダーが建築指導者として来村、村落住民の家にホームステイをしたり、全国からログハウス建設のために多数の人々が来村するなど、村落は多大のインパクトを受けた。ログハウス群完成後は、A氏ですら予想もしなかったような多数の人々がログハウスを利用して来村する、マスコミでも大きく報道されるなど、もはや、「杉の木村」を抜きにしては八河谷を語り得ないまでになった。

ログハウス群建設後、ようやく産業組合が結成され、ログハウス群の管理・運営に当たったが、産業組合に名を連ねたのは、A氏、S氏をはじめ、村落の役職経験者を中心とする八河谷住民の約半数であった。つまり、ログハウス群をめぐって、村落が2つに割れたわけである。ただ、産業組合に入らなかった半数の人にとっても、「杉の木村」の持つ勢いは如何ともしがたく、表だった対立には至らなかった。

このように、CCPT主導で建設されたログハウス群を、産業組合を結成した八河谷住民が譲渡してもらうというように、八河谷住民のログハウス群に対する姿勢は、受け身のそれであった。また、多数の外来者を相手にするような事業は、八河谷住民にとって全く初めての経験であり、その運営・管理も、CCPTからみれば、満足できる水準にはほど遠かった。実際、CCPTは、ログハウス群建設に続く「杉の木村」の拡充計画を提案するとともに、ログハウス群の管理・運営についても、ことあるごとに注文を付けざるを得なかったようである。

しかし、建設後4年目の1993年、八河谷住民の中に、初めて、積極的な動きが生じた。それまで「杉の木村」に食堂施設はなかったが、農業改良普及所の人から、食堂施設を作ってはどうかとのアイデアと、もし、村落住民全員がそれに賛同するのであれば補助金ももらえる可能性があるという示唆を得た。そこで、これを機に、A氏とS氏は、未加入だった世帯を精力的に説得、村落のほぼ全戸の

産業組合加入を達成、資金を供出しあって食堂施設を建設した。その背景には、「杉の木村」が多くの客を呼び続けているという動かしがたい現実、自分たちが管理・運営しているとは言え、「杉の木村」の中に自分たちの手によって作られたものは何もないという物足りなさ、CCPTからの注文を排除して、自分たちだけで管理・運営をしたいという希望、などが交錯していた。

4. 活性化運動の対象となった村落に関するグループ・ダイナミックス的考察

以上述べたように、現在では、ログハウス群「杉の木村」の管理・運営は、地元八河谷村落のほぼ全戸が加入する産業組合によって行われている。では、いかなる集合体のいかなる集合性を媒介とすることによって、このような現状に至ったのか、また、現在、「杉の木村」は、村落集合体の集合性においていかなる位置を占めているのか、これら2つの点について考察してみよう。

CCPTによるログハウス群建設の申し入れから、その建設、譲渡を経て、村落住民による運営・管理に至る過程において、専ら顕在化したのは、村落集合体の血縁的・地縁的集合性であった。ちなみに、八河谷村落の血縁関係は、A氏の属する家系とS氏の属する家系の2つに分かれるが、両家系の間にも婚姻関係があるので、村落全体が一つの血縁関係にあると言ってもよく、その意味で、村落の血縁関係と地縁関係は、ほぼ重なり合っていると言える。ログハウス建設後に産業組合を設立し、その管理・運営に当たったのは、A氏やS氏をはじめとする血縁的・地縁的集合体のリーダー的人物であった。

血縁的・地縁的集合性への依存は、村落住民が食堂施設の自力建設に至るプロセスでも、再び顕在化する。CCPTの経営的手腕により、「杉の木村」は村落住民が予想もしなかったような多くの人々を吸引する場となった…もう、後戻りすることなど考えようもない、前向きな大きな流れが出現してしまっていた。A氏やS氏は、産業組合に未加入の住民を加入させるべく、精力的に説得活動を展開する。A氏の言葉を借りれば、「なだれ現象」…影響力のある未加入者の賛同を得ることによって、それ以外の人々を一気に賛同者として…を起こしたわけである。つまり、産業組合の立ち上げ、産業組合の村落全体への拡大という2つの段階の両方において採用された戦略は、まさに村落集合体の血縁的・地縁的集合性に基づくそれであった。

では、現在、「杉の木村」は、村落集合体の集合性の中に、どのように位置づけられているのだろうか。「杉の木村」を訪れる多くの人々の目には、村落住民が行なっていることは、民宿経営一年間12,000人もの来訪者を呼び込むまでに成功し、かつ、村落住民の誇りにもなっている民

宿経営一と大差ないものに映る。実際、筆者も、当初はそう思っていた。しかし、彼らが、「杉の木村」の管理・運営に費やす労力の代価として得ている収入を調べるうちに、その額が、民宿経営という営利行為と呼ぶにはあまりにも少ないことに気づかされた。村落住民の中には山林所有者もいれば、村落の共有林もある。かつての木材景気のとときに得た収入で関西に賃貸マンションを所有する者もいた。第一、彼らには、農業という、それだけで生計を立てることのできる本業があり、その本業から得られる収入に比べれば、産業組合を通じて得られる収入は、あまりにも少ないアルバイト代としか言いようがないほどであった。

実は、「杉の木村」で住民が行なっていることを端的に指す言葉が、村落住民自身のポキャブラリーの中に発見された。それは、「総事(そうごと)」という言葉であった。総事とは、村落の住民が総出で行く、無償の共同作業である。例えば、共有林の手入れ、村落の掃除、道路の補修、村祭り、葬式、等が、従来行われてきた総事の代表的な例である。かつては、これらの総事に参加できなかった人に対しては、別途労働作業への参加が要求されたり、罰金が課せられたりもした。しかし、過疎化の進行に伴い、八河谷村落では、1980年代の中頃から、総事はほとんどおこなわれることがなくなっていた。

筆者らが、総事という言葉に注目したのは、「杉の木村」での作業を村落住民がそう呼んでいたからではない。

「杉の木村」における作業を総事と呼んでいた人は、誰もいなかった。住民のほとんど全員とのインタビューを含む数ヶ月に及ぶ現地調査において、筆者らが耳にした数多くの語彙の中で、「杉の木村」における彼らの活動をイメージさせる言葉として、筆者らが、いわば偶然に注目した言葉が、総事という言葉であったのである。「杉の木村」における作業は総事ではないのか、という仮説をもって、A氏から再び話を聞いたときのセリフは、われわれの仮説を支持するものであった。「そう、今の八河谷にとって、総事と言えるのは「杉の木村」だけかもしれない」。

ここに、CCPTによる能動的な活性化運動の成果である「杉の木村」が、その舞台となった地元村落の住民によって、彼らの伝統的な集合的行動パターンである総事として取り込まれていったことが明らかになった。O氏の言葉を借りれば、「地域活性化のモニュメント」として建設された「杉の木村」は、「総事」を行う場として、村落集合体の中に土着化していったのである。したがって、八河谷住民がログハウス群に対して示す反応や、産業組合の運営・管理の現状は、CCPTが期待したものとは言い難い。例えば、前述のCCPTによる「杉下村塾」、「耕読会」といった学問・科学とのふれあいは、「杉の木村」を開催場所として行われるにもかかわらず、八河谷村落からの参加者は皆無である。

しかし、忘れてならないのは、「杉の木村」で行われている総事は、あくまで、「新しい」総事であるという点である。その総事は、CCPTという能動的な経営感覚の持ち主によって創出された総事であり、また、年間1万人を越える外来者を相手にした総事でもある。それは、単に、消滅しかけていた総事の復活にとどまらない。それは、従来の総事が、村落「内部」における共有財産の維持・管理、あるいは、村落住民「内部」における互助のための総事であったのに対して、はるかに村落「外部」に開かれている。八河谷の村落集合体もまた、その伝統的体質としての閉鎖的集合性を有している。そうだとすれば、「杉の木村」をめぐる新しい総事には、その閉鎖的集合性にいささかでも変化のきっかけを与え得る可能性が秘められていると考えることはできないだろうか。

5. 結語

地域活性化という(地域全体の)集合性の再構築過程には、あまりにも対照的な2種類の集合性の相剋が必要条件であるように思われる。一つには、少数の人間からなる集合体の先鋭的な集合性、もう一つは、多数の人間からなる集合体の、長い歴史に裏打ちされた集合性である。智頭町活性化の10年は、前者が後者の力に抗して、その存在を確立していった過程であった。しかし、同時に、前者は、非常に緩慢ではあるが、確実に、後者の変容をもたらしつつある。10年という時間は、日々先鋭化を突き詰める前者の集合性を記述するにはあまりにも長く、その影響を受けて変化する後者の集合性を記述するにはあまりにも短い時間なのかもしれない。

智頭町の地域活性化は、現在なお進行中である。それどころか、本稿執筆現在(1995年夏)、明らかに新しいフェーズに突入しつつあるように見える。それは、先に図示した集合性の構図の延長では、もはや描ききれない新しいフェーズのようにも思われる。すなわち、CCPT集合体と地域集合体の圧力・反発の構図は、そのウェートを下げつつある。また大学人・知識人にしても、「外の世界」の人間としてのウェートを減じ、(たとえ、身近な内部にいてもなお)広範な人々に対自化の場を提供し得る存在として再定義されつつある。

これらの変化は、おそらく、CCPT集合体の集合性の変化と相即的に進行するだろう。あくまでも一つの可能性に過ぎないが、CCPT集合体が、一つの可視的「集団」としての様態から、より境界があいまいな、より緩やかな連結によって維持される様態へと変化するかもしれない。しかし、仮に、「集団」としての可視性を減じたとしても、あたかも変幻自在の軟体動物のように、地域コミュニティのひだの中にしみ込み、そして、岩をもうがって伸びる木の根のように、縦割り行政システムの壁を突き崩して、そ

の中に浸食していくならば、そこには、新しい住民自治に向けての一つの具体的な方向性が提示されてくるであろう。もし、そうなれば、それは、一山間過疎地の現象と言うにとどまらず、現在の日本社会が直面している大きな課題の一つ、すなわち、新しい政治・行政システムの構築にとって、一つの先駆けをなすものとさえ言えるのではなかろうか。

注

- 1)ジゲは、自分たちの土地という意味
- 2) 2mくらいの3本の棒の片方をくくって、三角錐状に立てたもの。通常、二つの三又(さんまた)に横棒を渡して、刈り穂や衣類を干すのに用いる。
- 3)ここに言う「エディター」とは、陣頭指揮型のリーダーではなく、人々のさまざまな活動をエディット(紡ぐ)するリーダーという意味である。

謝 辞:本稿執筆のための資料収集には、智頭町活性化プロジェクト集団の方々、および、八河谷村落住民の方々から多大な協力を得た。ここに、感謝の意を表する次第である。

参考文献

- 1) 溝口喜代子:いっ宿の前にいっ町を! (大分県湯布院市), 全国町村会・町村研究フォーラム(編著):地域を担う人材, 千里, pp.288-289, 1993.
- 2) 岡田憲夫, 杉万俊夫:山間過疎地域活性化の分析アプローチ, 土木学会論文集, 1996.
- 3) 杉万俊夫:グループ・ダイナミクスと地域計画, 土木学会論文集, No.506/IV-26, pp.13-23, 1995.
- 4) 河原利麻, 石川雅典:ふるさと生活の再構築—鳥取県智頭町における地域活性化のケーススタディ, (財)環境文化研究所, 1990.
- 5) 岡田憲夫, 高野博司:鳥取県智頭町八河谷地区実態調査報告書, 智頭町活性化プロジェクト集団, 1989.
- 6) 寺谷篤, 岡田憲夫:地域活性化活動から生まれたプロジェクト企画のシステム法—四面会議システム法, 土木計画学研究・講演集, No.14(1), 1991.
- 7) 鳥取県, 智頭町活性化プロジェクト集団:1989-94 CCPT活動実践提言書, 1990-95.

(1996. 1. 23 受付)

GROUP DYNAMICS OF ACTIVATION OF A RURAL DECLINING AREA: THE TEN-YEAR HISTORY OF ACTIVATION MOVEMENT IN THE TOWN OF CHIZU, TOTTORI, JAPAN

Toshio SUGIMAN, Hisatoshi MORI and Tomohide ATSUMI

This paper describes the ten-year history of the activation movement by a small group of residents in the Town of Chizu, Tottori Prefecture, a typical rural declining area in Japan. The basic facts of the ten year history of the Town of Chizu was documented and analyzed from a viewpoint of group dynamics (community dynamics). We show that the group of residents have successfully activated the area slowly but steadily, while overcoming strong resistance to change from the majority of residents. We also analyzed the involvement of influential persons into the community who have contributed to gradually overcome the resistance.